

滋賀大学経済経営研究所所蔵 「満洲引揚資料」で繋がった奇しき縁

佐藤仁史 / 一橋大学大学院社会学研究科 教授

「満洲引揚資料」との出会い

滋賀大学経済経営研究所所蔵の「満洲引揚資料」に関わって20年あまりになる。滋賀大学教育学部に赴任して2年目の2002年夏に阿部安成さんから突然メールをいただき、8月に彦根キャンパスで阿部さんと江竜美子さんから、研究所に寄贈されたばかりの「満洲引揚資料」について話を伺ったのが事の始まりであった。中国東北地方の歴史にはぼんやりとした興味を持っていたが、一次史料を通して向き合ったのはこの時が初めてであった。実際に簿冊群にざっと目を通した時、これが第一級の史料であることを直観した。2003年に2、3回目録作りに参加し、12月にはワークショップにおいて簡単な報告をさせていただいた。後者では、八木聞一(1897-?)という人物が記した「長春日橋生活誌抄」などを用いて、このコレクションが近現代中国東北地域史研究に持ちうる意義についての第一印象を話した。

ところが、2004年夏から長江下流域農村社会史に関するフィールドワークを開始し、毎年2、3ヶ月を現地で過ごすハードなスケジュールとなってしまったため、その後の整理作業には全く寄与できなかった。このことには忸怩たる思いを抱いていたが、幸いなことに阿部・江竜両氏による丁寧な作業によって、目録の作成や撮影・デジタル画像への変換などの整理が進められた。このコレクションを用いた研究の可能性について目配りの効いた文章があるので参照されたい※。

「満洲引揚資料」の再発見

疎遠になっていたコレクションとの「再会」のきっかけとなったのが、2009年4月に一橋大学大学院社会学研究科に転任したことである。不思議なことに、ここでは中国東北地域史の研究を志す大学院生が複数人いたこともあって、自然と「満洲引揚資料」コレクションの利用に思いが至るようになった。そこで2011年11月に有志で参観に赴いた。ゼミ生は思い思いに資料を捲っていたが、学部生の森巧君(現本学大学院社会学研究科特任講師)が目ざとく注目したのがまさに「長春日橋生活誌抄」であった。このことに私は「我が意を得たり」という気持ちになったことを今でも憶えている。「満洲引揚資料」の「再発見」はこのような状況のもとでなされたのである。

「満洲引揚資料」を用いた授業・研究

その後、「長春日橋生活誌抄」を授業で読解することになった。2012年と2013年の大学院ゼミ、2018年と2019年の学部史料購読の授業でそれぞれ読解を進めた。戦後に書き写されたものとはいえ、崩し字読解の正式な訓練を受けていなかった私や履修生は難読文字に難儀した。とはいえ、敗戦直後の「満洲」の緊迫した状況がリアルに記されており、授業に対する受講生の評判は概ね良かったように思う。

読み進める中で、八木聞一が東京高等商業学校の卒業生であること、同窓会である如水会に積極的に参加していた縁で満鉄副総裁の江口定條(1865-1946)の秘書として満洲に渡航することになった経緯、彼の満洲での活動の一端について『如水会会報』に少なからぬ記事が掲載されていることに気がついた。その後、「長春日橋生活誌抄」は、2018年頃から他に入手した引揚げ日記数種ともに翻刻して史料集として纏めることになり、『崩壊と復興の時代——戦後満洲日本人日記集』(佐藤仁史ほか編、東方書店、2022年)として結実した。「長春日橋生活誌抄」を介して、史料の作者、職場、学生、研究仲間たちと奇妙に繋がった縁が、次には史料の読み手たちと繋がっていくことを願っている。

翻刻作業の最中には何回か研究所に赴いてコレクションの他の部分も見てみたが、その度に様々な発見があった。在外資産補償問題や恩給請願運動といった現実生活に直結する問題群から引揚者の歴史認識に関わる問題まで、様々なレンジの研究課題を分析するための好個の史料群であると思う。近年、欧米の学界では非公式帝国としての「満洲国」に大きな注目が集まっている。関連研究の新たな展開に寄与する可能性を秘めている本コレクションは、国立公文書館アジア歴史資料センターのウェブページからも一部の利用が可能となっている。今後多くの閲覧者の目に触れて活用されることで、豊かな歴史認識の構築へと繋がることを期待している。

※ 引揚史の意義については、阿部安成・加藤聖文「引揚げ」という歴史の問い方(上)(下)』『彦根論叢』第348・349号、2004年、滋賀大学経済経営研究所所蔵の「満洲引揚史料」の概況については、阿部安成・江竜美子「『満洲引揚』スタディーズの試み——整理、調査、議論」『滋賀大学経済学部Working paper』No.98、2008年、をそれぞれ参照されたい。